

住所も告げなかった。

236

無我夢中で行なつたこの失明者の癒しは、後から考えてみると、小豆島の霊場をつかさどっていた高級神霊が、私を使って、信仰篤い病人たちを癒したのだらうと思われる。若輩の私にそんなことができるわけがない。神霊は私の足を動かなくさせて一行に出会わせ、私の体と気を使って、失明を癒したのだらう。

それはもちろん失明者のためでもあろうが、それ以上に、私のためになされたことだと思わざるをえない。なぜなら、私は、この一件によつて神仏の存在を絶対に信じるようになったからである。

また私はこの無我夢中の癒しを通して、謙虚さというものも学んだ。「これは自分が治したんだ、自分の力だ」などとはまったく思えない奇跡だった。私は神霊の偉大さを思い知らされた。謙虚さとは神霊の存在におののくことだと悟つたのだ。これは私の生涯において最も幸せなことだつたと思う。

### 病氣も治癒も魂の気づきのために

偉大な神霊の霊威がくだされた時、奇跡的な治療は起こる。それを仲介する役目を肅々と務めるのが、真の「ヒーラー」である。

そういった人は、自分が治しているなどという驕りはない。神霊に仕え、そのお仕事に奉仕しているという思いがあるのみである。自分の名前を宣伝したり、法外な金品を取ったりする人は、真のヒーラーではない。真のヒーラーは、その奉仕を、自らの魂の成長にとつて必要なもの、神霊から定められた課題だと受け止め、淡々とそれに従うのである。

神霊による治療も、万能だというわけではない。癒しには、「機」というものがある。病氣平癒を祈ることによつて、心の機が熟し、奇跡が起こることもあるし、逆にその人の魂の成長にとってその病氣が必要ならば、神霊はそれをあえて治さないこともある。何でもかんでも神様に頼めば解決する、というのなら、魂の成長の可能性などなくなってしまうことになる。